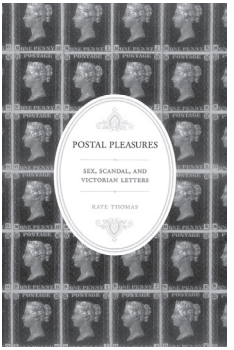
書　評



Kate Thomas, *Postal Pleasures: Sex, Scandal, and Victorian Letters* (Oxford: Oxford University Press, 2012)

猪熊　恵子

本書はそのタイトル通り、一貫して郵便システムを議論の中心に据え、1840 年の Penny Post 制度によってイギリス全土に 1 ペニーの郵便配達網が整備されたところから議論を起こし、ヴィクトリア朝の人々が巨大な情報ネットワークに組み込まれることによって、いかに「自己」のありようを変容させていったのかを捉えようとする。その前提として著者 Thomas は、郵便局を「国家装置」(31) として規定し、イギリス全土に整備された巨大な情報ネットワークを司った郵便局が、人々のテクスト生成と流通の双方に関わることでフーコー的な権力装置として機能していた、と主張する。そして、権力装置たる郵便局と、そのネットワークに組み込まれる個々人とのダイナミズムを、浩瀚な文献とさまざまな作品分析によって跡付けるのである。まるで郵便配達人の袋が様々な人々の多種多様な言説を混在させるように、本書もまた Anthony Trollope, Eliza Lynn Linton, Thomas Hardy, Bram Stoker, Arthur Conan Doyle, Rudyard Kipling, Henry James ら数多くの作家たちの作品を縦横無尽に読み込んでいく。それではこの混在した postbag を Thomas がどのように選り分けていくのか、まずは序論から考えていきたい。

序論はまず、Rowland Hill による 1840 年の Penny Post 導入をヴィクトリア朝イギリスにおける重要なモーメントとして指摘し、その歴史的背景を丁寧になぞりながら社会への波及効果を議論する。その際に重要なキーワードとなるのが democracy/democratic である。国内全域均一前払いで 1 ペニーという新制度が、従来の貴族特権を排し、国内における情報の流通を一気に「民主化」したことは言うまでもないが、Thomas の議論は単純

な身分的優劣の撤廃のみにとどまらない。郵便網の配備と共に国内に拡充された鉄道網が、人々の時空間認識を大いに変容させ、長大な距離感を一気に平準化させたこと（14）、郵便網の拡大とともに人々の識字率が向上し、あらゆる階層の人々がテクストを生産し、消費しうる主体として情報ネットワーク内部に組み込まれていったこと（21）、また全国に郵便コードが付与されることにより、人々の住む領域がすべて均一な法則に基づいて記号化されていったこと（26–7）など、さまざまな「民主化」の存在が提示される。つまり郵便システムがもたらした民主化とは、貴族と民衆との間の単純な格差撤廃ではなく、人々の存在や自己認識にかかわる多くの差異が抹消されていく巨大なダイナミズムだったということだ。

こうした差異の抹消の極致として Thomas が指摘するのが Anarchy である（25）。すべてが拡大の一途をたどり、同一切手を貼られた手紙が増え続け、その間に差異が見いだせないのだとしたら、そこに秩序をもたらすことは難しい。そしてこの郵便的無秩序の最たるものとして Thomas が議論の中心に据えるもの、それが性の平準化である。あらゆる書き手の性別は郵便制度の democracy を前にしてその個別性を失い、一方でそうした anarchy を利用することによって、人々は郵便制度内部で自らの性を自由にコントロールすることができる。この点こそ、Thomas が議論の柱として序論で立ち上げるものであり、一章から四章、あとがきにいたるまで、多くの作品分析を行う際に通底するテーマでもある。それでは実際に章ごとの構成を見ながら、郵便制度と性の無差別化がいかにして関連しあっているのかを跡付けていきたい。

第一章 “Postal Digressions” は序論で立ち上げた議論の柱をもとに、1889 年のクリーヴランド街事件に焦点を当てる。郵便局の電報配達の少年たちが男娼として使われ、その顧客に貴族がいたことから国家的スキャンダルとなったこの事件を取り上げ、Thomas は郵便局という「公的」機関内部で寝起きを共にしながら働く少年たちが、貴族という「公的」な人物の「私的」な欲望の対象となった、という複雑な公私のマッピングに注目する（48–51）。国家の名のもとに民衆の家々を訪ね歩く少年たちが、テクストの代わりに自らの体を他人の手に届けていたという皮肉な構造を指摘する Thomas は、これを貴族の私的な同性愛的嗜好が暴露された単純

なスキャンダルではなく、むしろその郵便制度に組み込まれたあらゆる人々が、性的逸脱のレッテルを貼った電報配達の少年たちの「流通」システム内部に図らずも組み込まれてしまった好例として議論している。つまり、すべての差異を平準化し、その内部に性的な無秩序の潜在性を包含する「郵便システム」の機能を象徴的に切り取って、スキャンダラスな形で人々に提示したものこそ、このクリーヴランド事件なのである。

こうして、社会全体に影響を与えた組織としての郵便局のありかたを巨視的な視点で捉える第一章に比して、第二章 “The Little Queen’s Head Can’t be Untrue” は、郵便局という組織で実際に働いた個人の作家、Anthony Trollope に焦点を当てる。機械的な創作と拙速な書きぶりがたびたび批判の対象となること（70–74）を指摘しつつ、Thomas はむしろ、あらゆる人々の差異や多様性を書き尽くす Trollope の尋常ならざる多産性そのものに着目し、その背後に潜むものを説き明かそうとする。もちろん、同様の試みは Richard Dellamora や J. Hillis Miller によってすでに行われてきたが、Thomas は両者の優れた読みを受け入れながらも、最終的にはまったく異なるアプローチを取る。Dellamora や Hillis Miller が、obsessive なまでの Trollope の書きぶりの背後に、彼の個人的な抑圧を読み解いたのに対し（79）、Thomas はむしろ、継続的な創作こそ、Trollope にさまざまな語り手のペルソナをまとわせ、性も身分も年齢もすべてを自在に使い分ける「非個人化」を可能ならしめたものだと結論づける。この論の裏付けとして *John Caldigate*（1879）の詳細なテクスト分析が提示され、作中の手紙が、その言説内容自体よりも「郵便システム」というネットワーク内での約束事や契約事項によって意味をなすものであること、同じく主人公 John の恋愛が感情面での純粋性ではなく婚姻システム内部における契約の履行・不履行が問題になる点が並置して議論される。しかし、個々のエピソード分析はきわめて洗練されているものの、ヒロイン Euphemia と Trollope の辛い幼年期とを結びつける後半部分の批評（96）は、やや議論に無理があるように思われるし、作家の幼年期を女性主人公に上書きする構図は、Thomas 自身の説よりもむしろ、Miller や Dellamora が取る「抑圧された中心への回帰」図式につながるようにも思われる。

いずれにしても第二章は、Trollope という郵便ネットワークにつなが

れた書き手が、いかに「自己」の性別・階級・職業・認識の壁を打破していったかを議論する。一方、第三章は転じて “queer” という重要なキーワードを設定し、Trollope の “Telegraph Girl”(1877), Eliza Lynn Linton の *Rebel of the Family* (1880), Hardy の *A Laodicean* (1881) の三作品を取り上げ、telegraph によってクィアな関係を築き上げる女性主人公たちを分析する。Telegraph girls が郵便局によって積極的に雇用されるようになった背景を、イギリス帝国主義との関連から丁寧に説き起こす Thomas は、中産階級の女性たちが国家に雇用され、国家を架空の父とし夫とすることによって、義務と勤労と服従の精神を学んでいったことを見事に跡付けている。また彼女たちの郵便局内での労働が、女性同士の疑似結婚の関係性に立脚するものであることに注目し、本来のヘテロな結婚に至る前の準備期間を国家が提供したものとして読み解く。しかしこれは、単にクィアな欲望が規範的な結婚へと回収される単純な図式を示唆するのではない。上に挙げた三つの作品終盤で、結婚したヒロインたちが依然として電信への愛着や女性同士の絆を忘れないのは、「郵便局」内のクィアな関係性の中で学んだ義務と奉仕の精神が活きているからだとして、Thomas は郵便的クィアネスを、ヘテロセクシャルな社会構造の対立項としてではなく、むしろその基盤として結論付ける。

第四章 “All the Red Route” では、米英間の帝国間郵便が男性同士の絆に例えられ、再度クィアな関係性が分析される。Arthur Conan Doyle や Bram Stoker の作品内部で、米英両国の関係を写し取るような男性登場人物の関係がどのように展開していくのかが、両国の血の混淆と帝国主義、ホモソーシャルな官僚組織などの観点から論じられ、そこに重要な軸として交差する帝国郵便網の存在が浮き彫りにされる。そしてここでも、男性同士のクィアな関係性は、ヘテロで規範的な関係性によって修正されるものではなく、より強固な男性的絆を築き帝国の支配を盤石にするための礎として提示され、不健全で不穏当なクィア的関係が、比較的妥当性の高いクィア的関係によって打破されるという構図が指摘されている。

こうして第一章から第四章まで Thomas は一貫して、郵便網が 19 世紀の人々をいかに包含し、彼らのクィアな欲望を刺激し、社会の中の差異を平準化しながらも大きな帝国としての枠組みを推進していったのかについ

て議論している。そして、これらの議論の最終局に置かれた「あとがき」は、「あとがき」という体裁とは裏腹に、最も熱のこもったテクスト分析を展開する。Henry James の *In the Cage* (1898) における telegraphist の心理に着目し、これまでの章で立ち上げたいくつもの論点を次々に参照しながら、cage の中の彼女が他者のテクストを打電する行為を通じて、いかに自己の性別や階級の垣根を越え、時に女性として時に男性としてさまざまな人物に憑依しながら自己意識を拡大していくかを論じている。そして彼女の体という媒体を通じて、人々の個人的な言説が国家的ネットワーク内部の公共言説へと変化するダイナミズムをも詳細に跡付け、自己の境界を打破して広がっていく彼女のクィアな欲望を浮き彫りにする。そして最終的に、あらゆる境界をつなぎ合わせて機能する情報ネットワークとしての郵便網が、いかに人々の欲望を生み出し、管理し、統治する機関であったのかを、簡潔に結論付けている。

ここまでテクストの始めから終わりに向かって順に概観してきたが、最後にもう一度巻頭に戻ってこの書評を締めくくりたい。Thomas は本書冒頭の謝辞において、一番に博士論文の指導教官であった Kate Flint への謝意を述べている。なるほど、常に十分な量の書誌的裏付をもって基盤を築き、その基盤の上に作家や時代背景にまつわる印象的なエピソードをちりばめながら議論を進める手際は、確かに Kate Flint のそれを彷彿とさせる。また本書が博士論文をもとにして書かれたものであるという点は、その質の高さに驚きを禁じ得ない一方で、納得できる事実でもある。博士論文とは本来的に、一つの議論軸を立ち上げ、その軸の周りに同心円状にさまざまなテクスト分析を配置する形を取らざるを得ないため、個々のテクスト分析の多様性よりもむしろ議論軸との整合性を優先させざるを得ない。事実 Thomas の議論を読んでいくと、一つ一つのテクスト分析やテクスト内部のエピソード分析が極めて精緻で洗練されているのに対し、章の締めくくりでやや拙速に大きなテーマ軸へと接続されるような印象を受ける時がある。しかしこのギャップゆえに、かえって個々のエピソード分析の美しさが光ると言ってもいいかもしれない。いずれにしても本書は、Kate Thomas の議論を個々の短い論文のレベルから、もう一度丁寧に追いなおしてみたいと思わせる力強さを持つものであった。